
世界が終わる、その時まで

ミッシ・ゴッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界が終わる、その時まで

【Nコード】

N5272F

【作者名】

ミッシ・ゴッシュ

【あらすじ】

守護者の青年・シシル。咎を背負う者・クラン。二人の男はそれぞれ
その思いを胸に旅立つ。

序章（前書き）

グロテスクな表現があります。御注意下さい。

序章

静寂の足音を聴け。

忍び寄る破滅はすぐ其処にある。

人々が目覚めぬ内に、混沌よりの使者は舞い降りる。

そう、始まりの日は近い。

骸の塔が築かれるまで、遺骨を抱き震えて眠れ。

愚かなる人々よ、静寂の足音を聴け。

第一章 始まりの日・1

朝の爽やかな風と共に、海の匂いが優しく町を吹き抜けた。

マクティアナ大陸、西の入り口。大陸の最西端に位置するメルニアは、漁業に重点を置きながらも、農業者も少なからず生計を立てている。大陸間の貿易を中心に、それなりに発展を遂げている港町である。

露店が立ち並ぶ大通りは活気に溢れ、新鮮な魚介類、或 あるいは果実や野菜を求める人々でごった返していた。マクティアナ人を始め、移住して来たのであるうカラバナ人、ミスミ人も少なからず見受けられる。

一年が終わりを迎えようとしているこの時期は、祭りの賑やかさに似た喧騒に包まれる。年末、年始に向けての準備で、人々は慌ただしく駆け回っているのだ。

人込みの波を掻き分け、息を切らしながら走る小汚い格好の中年の男がいた。苔生したかのように毛に覆われた太鼓腹を、大波の如く震わせつつ必死の形相でひた走る。それを追うように、男の後方を栗色の髪を後ろで束ねた青年 シシル＝ソルデアークが疾走していた。男の通った後、割れた人垣の間を走る彼は大した苦労もせず走れる為、その速度はずっと速い。

風を切り革製の外套 がいとう を翻 ひるがえ しながら、シシルは馴れた所作で行き交う人々を躲わして行く。男との距離は、縮まりつつある。

人々は何事かと興味本意でそれを見ているが、手を貸そうとする者はいない。マクティアナ人は基本的に、我関せずの風潮が根底に

強く根付いている。面倒事に自ら首を突っ込もうとする輩は、余程の変わり者か、好奇心旺盛な子供くらいのものだろうか。

男は路傍に置かれた果物籠を引つ掴むと、青年に向け放り投げた。中の果物を巻き散らしながら、籠は綺麗な放物線を描く。だが、それがシルに当たる事はなく、手前にいた恰幅 かつぶく の良いオヤジの側頭部に弾かれた。オヤジは突然の衝撃に狼狽 ろうばいすると、体勢を崩し盛大に尻餅を突いた。一つ苦しげに呻いた後、糞野郎と離れて行く背中に罵声を飛ばした。

転倒したオヤジを過ぎ去り際に、シルは果物籠から溢れた旨そうな林檎を拾い上げると、盛大に噛り付いた。その甘さに思わず頬を緩め、何度も顎を上下させる。もう一口だけと、胃袋が催促するが思い止まった。

東門に近付くにつれ、露店の数も減り、通行人も疎らになっていった。

男の吐く息は白く染まり、肩を大きく上下させている。長時間走り続けた所為で、体力も尽き掛けていた。

逃げる事を漸く観念したのか、懐から小振りの刃物を抜き、追跡者を返り討ちにしようとする。きびす を返す。

男が振り向いたその刹那、鮮やかな赤い球体 真つ赤に熟れた林檎が中空を駆る。振り向きざまの男は躲わす事も出来ず、その丸い物体を顔面で受け止め、醜い悲鳴を短く上げた。

衝撃で体を仰反らせ、そのまま倒れた男は後頭部を強打し、またもや小さく呻く。その周囲には挫滅した林檎の欠片が飛散し、甘い香りを漂わせている。

顔の前後を襲った衝撃に顔　かんばせ　を歪め、男は倒れたまま、焦点のずれた瞳で虚空を見上げた。その鼻からは、鮮血が勢い良く噴出している。

林檎を投てきした張本人　青年が男の元へ歩み寄り、鋒　きつさき　を男の首筋に向けた。刃物は男の持ち物だが、今の所有者はシシルである。

「手間掛けさせんなよ」

青年は乱れた前髪を掻き上げ、仰向けの男を睨み付けた。そして、軽く弾む肩を落ち着かせるように、深く息を吐いた。

男は後頭部と鼻を擦りながら、青年へと向き直り胡床をかいた。拉げた鼻梁が痛々しい。

男は懐から装飾具の入った小袋を取り出すと、シシルの前に差し出し

「盗んだ物は返すからよ、見逃してくれよ、な？」と、下卑た笑みを浮かべた。

「駄目に決まってるだろ」

微塵の慈悲も持ち合わせていないかの如く、シシルは更に短剣を突き付けた。

「明日、帝国軍に引き渡す。それまで、大人しくしてるこつたな」

男は弱々しく項垂れると、シシルの指示に従い路地へと進んだ。

盗人を留置所まで連行したシシルは、飛込んで来た依頼をこなし、

帰路の途についていた。中心部から少し離れた自宅へ近づくに連れ、喧騒が遠ざかる。

何処までも澄み渡る蒼穹とは対照的に、シシルの心には霞が掛つていた。

「あんなん相手に、何やってんだかな……」

己の双眸と同じ色をした空を見上げ、静かに愚痴を溢した。だが、どんなに小さな悪事であれ、それを見過ごす訳には行かない。そんな事は疾うに理解している。幼い時分より厳格な父親からきつく教えられて来た。しかし、自身の實力では、今以上の事は望めない。

累加して行く犯罪に追われながらも、こそ泥程度しか相手に出来ない未熟な自身を、不甲斐ないと同時に忌々しく思い、彼は浅い溜め息を漏らさずにはいられなかった。

肌寒さに身を震わせる。足取りは重く、自宅への道程は果てしなく遠く感じられた。吹き荒ぶ真冬の風が、シシルの心を強く乱した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5272f/>

世界が終わる、その時まで

2010年10月15日22時00分発行